

「2024年中国・浙江大学スプリングスクール派遣報告書」

京都大学文学部2年 廣本 行彦

今回中国に渡って得た経験は、私にとって特に学習面での意欲・知識において極めて貴重なものだった。

まず意欲という点では、帰国後、何をどのように勉強していくかについての指針と自信、およびさらなる長期的な留学計画についての目標を得られたことが重要な収穫だった。私は中国文化、特に文学について勉強したいと考えているが、今回中国に渡り、中国において古典文化が及ぼしている影響の大きさを実感することができた。街中のいたるところに故事古典に由来する言葉が散りばめられ、史跡を観光する人々の数がすさまじく多いことを見ると、中国人は今でも歴史に誇りをもち、歴史をよりどころにしていることが看取され、ある種の安心感を覚えた。というのも、日本では中国学への興味がだんだんと失われており、自分はこのまま中国文学を学んで用いるところがあるのだろうかと不安になっていたが、上記の状況を見、自分はこの道を安心して選んでよい、そこには人々がいると実感できたのである。このことはモチベーションの重要な源泉になるし、実際私にとってはこの留学で最も意義深い経験であった。さらに今回の留学を通じて、中国への一年間の交換留学を具体的に検討しようと思うようになった。私は今留学時点で二回生であり、交換留学するとカリキュラムの都合上留年せざるを得ない。また、中国で暮らすという経験がどのようなものか分からないことも、交換留学に後ろ向きな要因だった。しかし、実際自ら現地に赴き、表面的・短期的ではあるが現地の暮らしを体感することで、この国でもっと長く暮らしてみたい、もっと多くの場所を旅行しもっと多くのことを学びたいと、それだけの価値があると少しずつ確信できるようになった。

また知識という点では、今までは紙面上での知識だったのが、実際に現地に赴くことで経験と一体化して、知識を己の血肉と化すことができたのが良かった。私は今回、学校側で用意されていたプログラムのほかに大学付近の西湖、杭州付近の紹興・蘇州・南京などに行ったが、いずれも重要な史跡がたくさん存在する。しかし日本にはそれぞれどんな場所かはおろか、それぞれの位置関係すら把握するのもままならなかっただろう。中国では、実際の観光のために自主的に交通機関やルート、目的地を調べるので、自分の経験として地理感覚や雰囲気を得得できる。私はこれで杭州・南京・上海あたりの地図とそれぞれの地域にあるものをぼんやりと自分のものにできたが、このことの後学への意義は計り知れない。さらに、中国語学習においても当然ながら成果があった。日本で中国語を学んでも、中国語を読み書きする技能は向上できるが、聞く話す力は上達させにくく、上達の実感も湧きにくい。しかし中国では常に中国語が耳に入る環境であり、分からないことがあると中国語でやり取りするしかないので、強制的に聞く話す力の練習になる。二週間しかないで、新しく学べることは限られているが、重要なのは自分が相手の中国語を理解でき、相手が自分の中国語を理解してくれるという経験であり、勉強の実感をつかむことができた。中国についての知識という意味では、文化理解も大きく促進できた。日本にしながら得られる情報は決して中国のすべてではなく、そのほんの一部に過ぎない。例えば政治や経済のニュースはあるが、それが実際に中国で暮らす人々の様相を反映し尽くしているはずがない。中国でなまみの人と交流することで、国境を越えても変わらない人々の優しさや温かさ、あるいは国ごとに異なるしきたりやマナーを実感でき、中国との相違点と共通点を軸に、自分の文化を相対化する眼を養うことができた。

以上の諸点が、今回の留学で得た主な成果であるが、これらの経験は全て実感において把握されたものであり、文字によって表現し尽くすことは難しい。しかしそれは同時に、将来の勉強や長期的な留学を見据える上で、今回の経験が何にも代えがたい価値を持っているということでもある。この経験をもとに、今後も学習を進めたいと思う。